資料紹介

口承文芸調査の五〇年

関敬吾・鈴木棠三両先生の書簡に導かれて

Research Materials

佐々木達司

はじめに

今年（二〇〇五年）の五月連休に書類の整理をしていたら、関敬吾先生・鈴木棠三先生からの書簡が出てきた。それらを読み返しているうちに、私が口承文芸調査に関わって五〇年、両先生の書簡によって導かれたことが今更のように思い起こされたのであった。

関先生の『日本昔話集成』に出会い、昔話が学問になることにショックを受けて何の知識もないままに昔話の調査を始めた。後に鈴木先生の『故事ことわざ辞典』『ことば遊び辞典』に触発され、ことわざ・なぞなぞ・俗信をカード化するようになった。これまでに編んだ本『青森県昔話集成』や『津軽ことわざ辞典』『青森県なぞなぞ集』は両先生の模倣にすぎない。

地方には同学の先輩もいなかったので本だけが頼りだった。思いあまって直接関先生に手紙で教えを乞うた。今考えると汗顔の至りだが、先生は無学な地方の青年にも懇切に対応して下さった。後に鈴木先生にもご指導を頂くことになったが、その頃は暮らしに余裕がなく直接お訪ねすることも叶わなかった。長い間書簡だけの交流が続き直接お目にかかったのは、鈴木先生とは一九七二年に鎌倉のお宅を訪問した時、関先生とは一九七七年の日本口承文芸学会設立大会の席上であった。

往復書簡による師弟関係は、関先生が一九九〇年に鈴木先生が一九九二年に亡くなられるまで続いた。特異なケースではあると思うが、研究史の一事例として報告したい。

『日本昔話集成』との出会い

一九五五年（昭和三〇）のこと、町の本屋の棚で『日本昔話集成』（第一部 動物昔話）を見つけた。日本各地の昔話を体系的に分類し分布を示した専門書だったが、子どもに語る昔話が学問になるとは思ってもみなかった。さっそく買い求めてむさぼるように読んだ。

図書館もない田舎町の文房具屋をかねた本屋に、どうしてこんな専門書が配本されたのか今でも不思議に思っている。『日本昔話集成』は全六巻、一冊の定価が四五〇円から一、一〇〇円だったから月給七、〇〇〇円の身にはかなり高価な本だった。

当時私は私設保育園に勤め、町の下宿屋暮らしをしていた。同居人には独身の中学校・高校の教師や会社員、冬季には遠距離通学の高校生も泊まっていて、同じ食卓を囲んだ。たまたま相席の高校国語教師の野呂嘉弘さんが、國學院大學で牧田茂先生に民俗学を学んだといい、牧田先生の近著『生活の古典』を読むよう薦められた。牧田先生とはその後学会で知遇を得、何冊か著書を頂いた。

下宿では女子高生からはわらべうたを、宿の主人夫婦からは昔話を聞いた。今では見られなくなったが、下宿屋は知らなかった人々が共同生活をする場であり、同居人は同世代で互いに刺激しあう関係だった。植物採集に熱中していた高校教師や理科の中学教師からも影響を受けたし、太宰治の作品を読む会や、津軽民話研究会が作られたのもこの下宿屋であった。まさに下宿屋文化とでもいうべきものが存在していたのである。

身近にあった昔話

私は津軽の稲作農家の三男で、昔話がいつも身近にあった。母が病弱だったため祖母に育てられた。祖母は学校に入らなかったので文字は読めなかったが、物知りで百話クラスの語り手でもあった。村で祝言や葬式があれば料理頭として大勢の女性を使い、メモすることも筆算することもなく五〇人以上の客膳を調え、予算内にきちんと収めていた。

祖母は毎晩のように昔話を語ってくれた。夕食後の囲炉裏端や寝床の中が主だったが、山道で山鳩の声を聞くと「山鳩不孝」を語るなど、折に触れて語ってくれた。また、山に行くとき葬式の足半草履を履けば蛇に噛まれない、山で弁当を食べたあとは箸を折って棄てないと狐に化かされるなど、昔からの言い伝えを大切に守っていた。民俗に対する関心はこの時期に形成されたと思っている。

昔話絵本や学習雑誌と親しむようになってからは、読んだ話と祖母から聞いた話の筋が違うことに疑問を感じていた。外国の話では、『小学生全集』でギリシャ神話や、一九四二年に出征した次兄が送ってくれた『布哇の民話』を読んだ。真珠湾攻撃の明くる年だったが敵国（当時はそう呼んでいた）の本がまだ売られていたのだろう。

東京で働いたあとUターンし保育園に勤務した。事務職だったが男の子たちにつきまとわれ自由遊びの時間に「三枚のお札」を語ったりした。そのうちに祖母から聞いた昔話を記録しておかなければと思うようになっていた。

津軽民話研究会の頃

一九五八年六月、国語教師の野呂さんと津軽民話研究会を発足させた。自転車で郷土史家を訪ねては話を聞いた。元小学校長が多かったが、考古学・民俗学・植物学などに通じていた。植物採集で知られる斉藤廉先生は『妖怪談義』について教えてくれたし、『亀ヶ岡文化』の著書がある佐藤公知先生は「民俗学をやるなら『津軽口碑集』を読みなさい」と、蔵書を貸して下さった。郷土史家といわれる人たちは民俗にも関心があり当時出版された本をきちんと読んでいたのである。

最初の民俗調査はその年の夏休み、野呂さんと二人で県境をめざして秋田県に近い岩崎村（現深浦町）に出かけた。汽車賃の工面もやっとで米持参で野宿しようということになった。南端の木蓮寺では三軒が細々と沿岸漁業をしていた。まだ電線も引かれていず乾電池でラジオを聞いていた。一軒の家にお邪魔して話を聞いた後、囲炉裏で飯を炊いてお握りにしてもらった。そのお握りと貰った漬け物を夕食に舟小屋で野宿するつもりが豪雨に遭い、ずぶ濡れで深夜の宿屋へ駆けこんだ。二人の有り金を掻き集めて宿代を支払ったのも今では懐かしい思い出である。

その後野呂さんは転任し、弘前大学生の久保孝夫さんが加わった。久保さんは函館市出身だが休みには実家に帰らず、私の下宿にいることが

多かった。私が勤務している昼間、彼は原稿の浄書やカード書きをし、休日や夜間には一緒に近くの村へ調査に出かけた。

五〇年前の調査事情は今とは大きく異なる。コピー機もパソコンもなかったし、テープ・レコーダーはあったものの大型でしかも高価だった。当時はまだテレビも普及していず、村人は方言コンプレックスから初対面の人と話したがらなかった。初回は顔つなぎ程度で、二回目から昔話を聞いた。それも目の前でノートを広げることが憚られ、話は記憶に留め家に帰ってから急いで要点をメモし、それを後で文章化していた。無意識のうちに調査者によって改変が行われる余地があった。テープ録音をそのまま文章化する現在のやり方とは異なるので、当時の資料を読むときはその点に注意する必要があろう。

本や資料は借りてきて必要な部分を書き写した。近くに図書館もなかったので、久保さんに弘前市立図書館や青森県立図書館で筆写してもらった。まだ写本の時代だったのである。そのために多くの時間を費やしたが、得たものも多かったと思っている。昔話調査で録音するようになったのは、カセット・テープレコーダーが普及した一九七〇年頃からである。

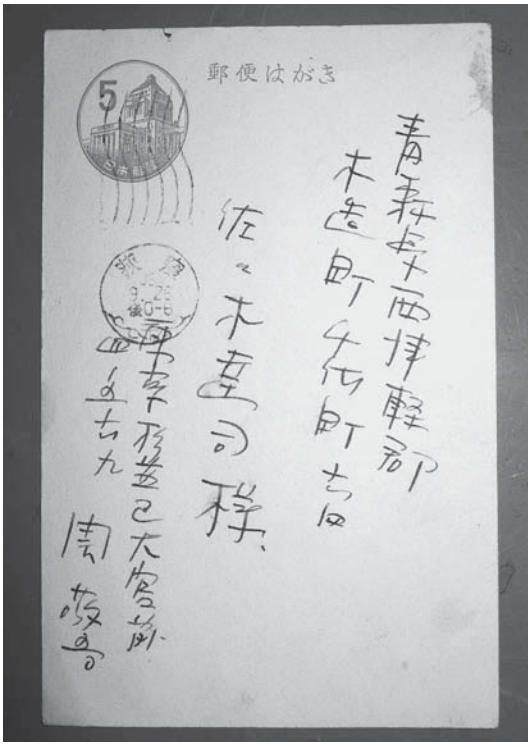
『西北のむがしコ』を新聞連載

一九六〇年、地域の新聞『青森民友』から、昔話を連載してくれないかという依頼があった。この地域は西北と呼ばれているので「西北のむがしコ」と題し三月から七月まで一〇〇回続いた。四〇〇字詰め原稿用紙三枚に挿絵入りという新聞小説の形式だった。調査で集めたもの、私が子どものころ聞いたもの、『津軽口碑集』に文語体で記録されたものを選んだ。職安勤務の傍ら絵を描いている二一歳の藤田健次さんが挿絵担当だった。彼も近くの農家に生まれ昔話の中で育った。勤めを終えると私の下宿に泊まりこんで、夜が更けるまで語りあった。今は版画家として活躍している。

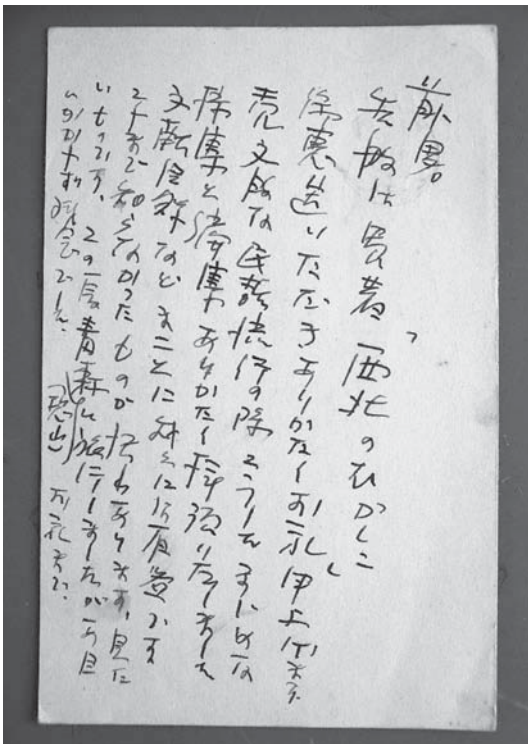
連載が終わり八月に新聞社が本にしてくれた。それぞれの昔話の後に分布（同話型の伝承地・資料名など）をつけたのは、『日本昔話集成』から学んだことである。

本ができて関敬吾先生にもお送りした。そして思いがけず関先生から返書を頂いた。（書簡は原文のまま、以下同じ。〔　〕は脱字を補足した）

前略　先般は貴著「西北のむがしこ」御恵送いただきありがたく御礼申上ます。売文的民話流行の際、こうしたまじめな採集と編集ありがたく拝領いたしました。文献目録などまことに我々には有益です。これまで知らなかったものが沢山あります。見たいものです。この夏青森（恐山）に旅行しましたがお目にかかれず残念でした。お礼まで。（1960年9月26日付葉書）



関1　1960.9.26　葉書表



関2　1960.9. 26　葉書裏

その後、先生からたびたびお手紙を頂いた。先生は米福・粟福などシンデレラ型の昔話の研究をされていて、関係資料に関する問い合わせであった。

前略　ご健在のことと存じます。

先般御恵送いただきまして「西北の昔話」面白く拝見しております。つきましては御手数とは存じます。二四頁の「米福」の話は稲垣村、木造町の二つならべてあるようですが、どこからどの部分が稲垣村か、また木造町のものか、御知らせいただければ幸と存じます。多くは栗拾いから始まっているが、この話では祭からはじまっておりますが。（1961年9月11日付葉書）

御手紙ありがとうございました。今「米福」の昔話をまとめているのでお手数をかけて申訳ありませんでした。この話は全国五十ばかり採集されておりますが、ほぼ東日本ばかりです。

大体つぎのような形式になっております。

一、継子の虐待。二、栗拾い、継子は破れ袋、糠団子。三、山姥もしくは山姥と鬼の小屋に泊る。四、米粟つき、水汲み、糸つむぎの仕事。援助者、雀、婆、坊など。五、継子の祭見物。妹、若者に継子が発見される。六、殿様、若者が求婚。七、継母は妹をほめ嫁にやらうとするが継子がもらわれる。八、継母、実子が田螺になる。貴著で変っている点は、祭見物に先に行くこと（木造）、山姥の小屋が鬼のバクチに変っている点（稲垣）です。鬼のバクチは普通、「栗拾い」という昔話の後半と結合し、妹が失敗するとい〔う〕ことで終っている。

一、そこで稲垣の話では、二四頁の「村の祭の日…」以下二五頁の下段の「お祭に行くことが出来た」までが、二七頁の下段「泣きながら帰った」のつぎに来るのではないかと思いますがいかがでせうか。

二、二六頁の「鬼のバクチ」が稲垣、木造の両方とも入っていて、それが結婚につづくかどうか。

以上のような疑問がありますので、両方の話の組合せを詳くお知らせいただければ幸と存じます。と申しますのは、青森県では「米福」の話が三戸の方と津軽の方とでは構造に相違があり、したがって文化的に相違があるのではないかと思はれ、貴著の話がその中間にあり、重要な資料となるので度々お願い申上げる次第です。なほ人類学の結果からも、西と東は相違し、津軽の昔話は山形、新潟にむしろ同じ構造の話が見られ、青森はこの意味でこの昔話の研究にとって重要な場所ではないかと思います。米福粟福の場合の組合せも地域によってのちがいがあり、語り手が勝手にかへたのではないようです。なほ鰺ヶ沢の御採集も崩れていても結構ですからお知ら

せいただけば大変に参考になります。

以上重ねてお願いいたします。（1961年9月22日付封書）

前略、いろいろ御無理お願いして申訳ありませんでした。早速御知らせいただき、誠にありがとうございました。無意識に語られる昔話が生活相の相違とどうちがうかということは外との文化との比較研究が必要ですが、南部と津軽で現在もなほ大きく文化が相違していることは、伝統的文化の根強がうかがわれ、大変に参考になりました。何か両方の文化の差違について書いたものがあったら、お知らせいただければ幸と存じます。（1961年9月30日付葉書）

『青森県昔話集成』の企て

一九六五年、青森県児童文学研究会の北彰介会長から「既刊の昔話集が入手できないなので、会員のために復刻、合本できないか」との相談を受けた。私はかねてから県集成を考えていたので、それを提案した。まだコピー機がなかったので会員が昔話集の筆写をし、私が編集を、北さんが出版を担当することにした。

それについて関先生にご相談したところ、次のような書簡を頂いた。「編集の方々が古事記における太安万侶の役割を」とあったのにびっくりしたが、今にして思えば先生の『日本昔話集成』に賭けた自負だったのではないかと思っている。

御書面ありがたく拝見いたしました。益々御勉強の由大慶に存じます。

青森県の昔話の集大成の御計画まことにありがたい有益な企てで双手をあげて賛成し、一日も早く完成されることを心から望み、私に出来ることなら出来るだけのことはしたいと存じます。

つきましては、私見を述べることをお許し下さい。御参考になればと存じます。

一、昔話は古事記現代版ではないでせうか。原典がしっかり編集されておれば、児童文学の再創造にも、農民文学の素材としても使はれますし、民俗学者はそれぞれの立場から自由に使うことができます。最近流行の民話はときとしては児童文学でもなし、それかといって民俗学的に利用できるものは大変少なく、われわれはときどき残念でならないことがあります。貴下の御手紙によると、民俗学の面でも役立つようにとの御配慮、大変有益なことと思います。

さらに、青森は日本文化の北限であり、昔話が集大成された場合には、青森県の文化的地位の研究に、ひいては日本の昔話研究に大いに役立つと思はれます。

昔話以外にも青森には数々の文化財があり、将来それぞれ集大成されなければならないし、その場合、昔話の大集成はその一環として青森文化研究の重要な意味をもって来ます。

基礎資料が出版されてあれば、将来いかようにも利用することが出来ます。目前の利益を犠牲にされた御計画に心から感謝します。

二、私の日本昔話集成にしたがって編集されるとのことありがとうございます。今では修正しなければならないところが多々ありますので、それを御承知の上御利用下されば幸です。（あれを要約したものが、英語版、ドイツ語版でることになっております。）疑問がありましたらその都度御連絡いただければお答えいたします。

なほ最初に例文としてあげられるものは青森らしいものをあげられるのが望ましいと思います。

三、すでに刊行されているものは—大部分は青森出身の方でもあり、青森文化研究のためでもあり、また利益を目的としたものでもありませんし、著作権のことはしばらくおいて、御了解を求められ

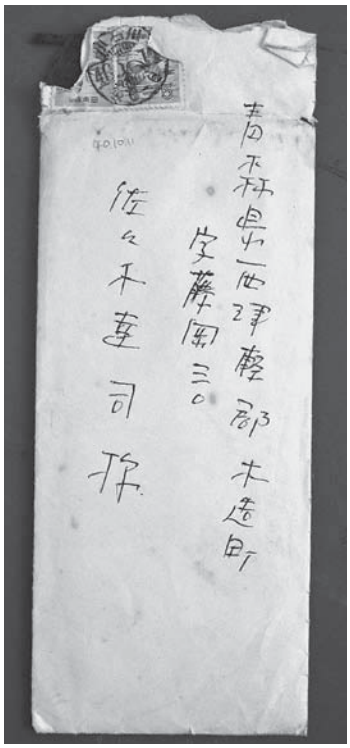
てはいかがでせうか。

四、記録される場合に採集地名、語り手の性別、年令、職業などわかっているものは煩雑にならない限り御考慮頂ければ幸です。

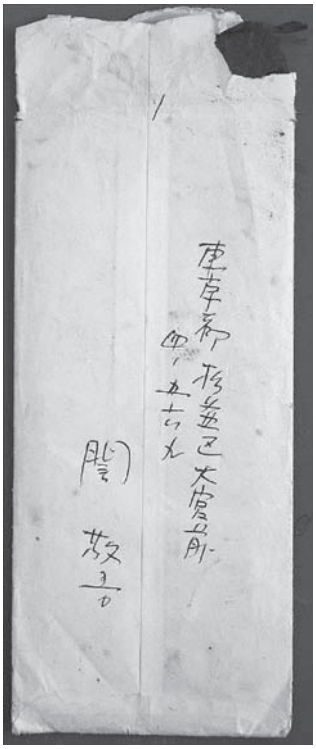
五、奥南新報に出たもの—私は新聞の切抜をしましたが—是非出して頂きたい。—実はあれだけでもなんとかならないものかと考へたことがあります。

困難ではありませうが、日本文化研究のため折角御尽力願上げます。

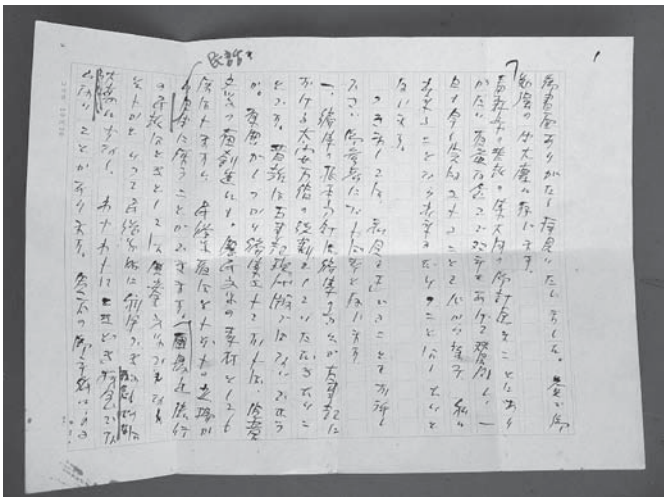
私も一昨年から昨年までドイツの大学で一年半ばかり日本民俗学一般と昔話の講義に行っておりましたが、日本の昔話に大変な関心を示しております。（1965年10月11日付封書）



関3　1965.10.11　封書表



関4　1965.10.11　封書裏



関5　1965.10.11　封書本文1

御手紙拝見いたしました。長い御努力の結果が大冊となって上梓せられることの喜びを禁じえません。青森県の文化財の保存のためばかりではなく、昔話研究、民俗学研究の歴史に貢献すること大であることを確信します。

小島君が適用したような方法でなされることは望ましいことと思います。分類など完全にできるものではありません。小生の「集成」の分類も不十分でいま全体にわたって検討しておりますが時間がかかります。例へば、瓜子姫は、「継子と鳥」「継子と笛」の後半、「鬼婿入」（奄美大島だけ伝承）の後半と結びついて一つの完成した昔話となります。一寸法師、桃太郎はおそらく八股の大蛇から派生したものでせう。八股の大蛇も不完全な形式です。これまでの瓜子姫、

桃太郎の解釈も大きく改訂されなければなりません。分類は現段階においてはできるだけ類似したものを並べておくことが、検索に便利で、また研究に役立つと思います。

つぎにおたづねの件を項目にしたがってお答へします。

一、補遺分類の件、六の二、百合若、集成Ⅲ八五六。「玉のみの女」「天の庭」い（ま）現在奄〔美〕大島のみ。青森にあったら知らせて下さい。「生き返った男」（六五四）は、魂の入れ代った話、幽霊女房のつぎはどうですか。「死んだ娘」も奄美だけです。「大木の秘密」（六五六）「木霊女房」が「聴耳」のつぎ、「物言ふ魚」「水蜘蛛」も動物昔話として聴耳のつぎ、「長良の人柱」は主として伝説として伝承されているといふので、別あつかいにしておいた方がいいと思います。

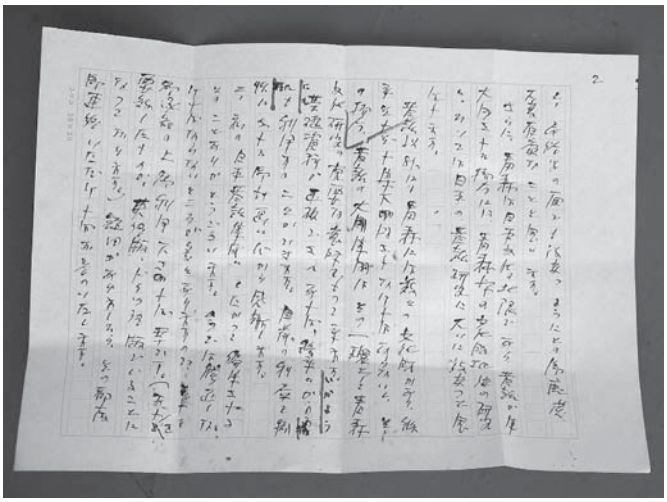
二、継子譚ハ親と子の争いだけでなく、少年少女と怪物の争いともなっていますが、一応継子話の系統のところにおいた方が便利だと思います。

三、山姥の糸車、「手っきり姉こ」の一六三頁、背高殿の中にこのモティーフがあります。猫と釜蓋も同系統です。

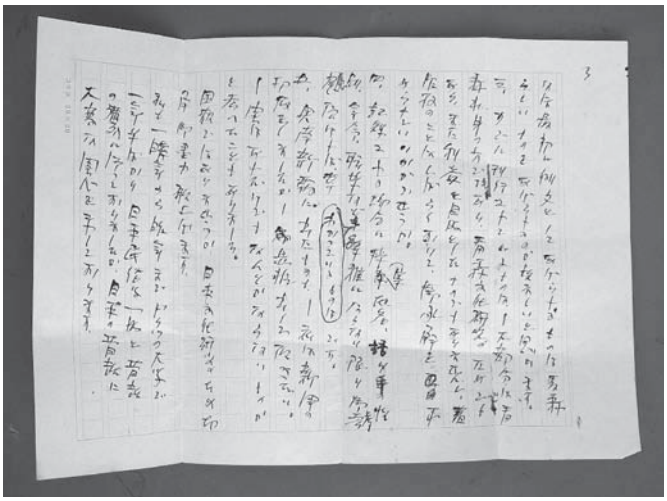
四、鵠ハ鶉（ウヅラ）の誤植

五、「村の話」のうち、私の「集成」から引用されて結構です。御利用下さい。

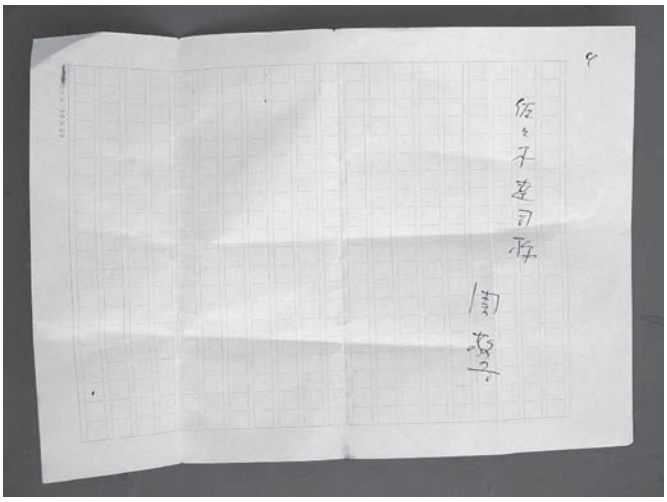
六、文献からの再話ハ除いても結構ですが、重要な話でしたら文献が明確なら注記して残されてもいいと思います。しかし採集地、



関6　1965.10.11　封書本文2



関7　1965.10.11　封書本文3



関8　1965.10.11　封書本文4

話者が不明なら除く方が、理論的に一貫してすっきりするでせう。（1968年11月13日付封書）

『青森県昔話集成』上巻は関先生の序文を頂いて、一九七一年に青森県児童文学研究会から刊行した。先生はその中で、青森むがしことの出会いは「村の話」の切り抜きを柳田國男先生から見せていただいたときであるとし、さしあたり二つのことを期待する。第一に、県の東西の話に相違があるのは、日本海岸と太平洋岸をたどって北上したのではないか、いかなる理由によってそうした差異が生ずるに至ったか。第二は、マージナル・エリアの問題である。海峡が昔話の伝播にどれだけ抵抗線となっているか。まだ十分に明らかにされていない。と述べている。

下巻の編集は難航し関先生から叱咤激励され、六年後の一九七七年にようやく刊行した。

その后、御壮健のことと存じます。

先般は「昔話集成」（上）ご恵送いただきありがとうございました。編集に大変お骨が折れたことが、読んでいるうちに判ります。誰かやるべきことを骨惜しみなく遂行して下さったことを心から感謝いたします。下巻が早く出来ることを心待ちしております。（1971年7月22日付葉書）

老人大学の受講生による昔話発表を一冊にした『木造町のむがしコ集』をお送りしたところ、語り手になるべき老人が聞き手になることに興味を示された。それは盛んになりつつあった語り手論への関心であったのだろう。

先日は「木造町のむがしコ集」御恵送いただきありがとうございました。本書編集の目的は長寿大学学習目的とのこと。これまでの語り手が逆に聞き手に変化したとも解釈されますが、その反応はいかがでせう。最近、若い研究者は昔話の語り手聴き手に興味をもっているようですが、その結果、反応をお知らせいただければ幸、お礼かたがたお願いまで。（1984年8月22日付葉書）

口承文芸学会設立大会

一九七七年（昭和五二）五月一四日、國學院大學において日本口承文芸学会設立大会が開かれ、関先生が「口承文芸の諸問題――方法に関連して――」と題して記念講演された。私は演壇の前に座って聞いた。私にとっては学会も学術講演も初めてのことで新鮮だった。

関先生は初代会長に選出された。懇親会で初めて先生にお目にかかった。「青森の佐々木です」とご挨拶申し上げると、すぐ「ああ『西北のむがしコ』の……」と返され、しばらく懇談させていただいた。その中で先生は「奥南新報の村の話だけでも何とかならないか」と言われた。私には全く見通しも立たないので、ただ「考えてみます」とだけ答えた。隣には三谷栄一先生がおられた。

懇親会の席で野村純一、武田正、阿彦周宜の皆さんと出会った。地方で孤立している私にとって大きな刺激であった。

県史叢書に「村の話」集成

『奥南新報』に一九二九年から一、〇三三回連載された「村の話」は、聞いたまま報告することを求めた投書欄であった。その中の昔話を整理分類し、柳田國男先生が「八戸地方の昔話」と題して雑誌『昔話研究』誌に連載されている。これは話型研究の基礎になったと考えられる。関先生は『昔話研究』の編集を担当されていた。

私は『日本昔話集成』で初めて「村の話」を知った。『青森県昔話集成』編集の際は人手も予算もなく、先生のお許しを得て『日本昔話集成』から孫引きせざるを得なかった。

『青森県昔話集成』が機縁となり小澤俊夫先生に誘われて、一九七八年から『日本昔話通観』の編集に加わった。口承文芸学会で関先生にお会いしたら、「今、何をしているのか」と尋ねられたので、「通観のお手伝いをしています」とお答えしたら、「村の話はきちんと入れてほしい。必要なら私の手元に切り抜きがあるから」と仰ってくださった。先生は『日本昔話集成』を大幅に改訂した『日本昔話大成』を編さん中だった。その頃『大成』と『通観』の刊行が同時進行中で、両者が張りあっていると言われていたが、先生に全く意に介していなかった。『日本昔話通観』（青森）編集にあたっては八戸市立図書館に通い、大きな新聞綴りから一人でコピーをとった。

それから「村の話」の出版を考えたが、資料が膨大で全くメドが立たなかった。

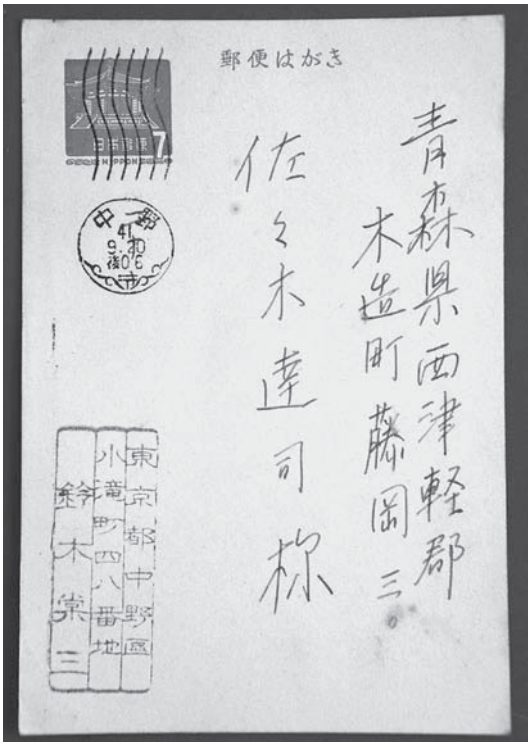
一九九六年から青森県史編さん事業が始まり、小池淳一民俗部会長の提案によって『奥南新報「村の話」集成』が最初の仕事となり、五人のチームを編成し編集にあたった。八戸市立図書館所蔵の『奥南新報』をベースに、仙台市の夏堀謹二郎先生所蔵の同紙と「村の話」の切り抜き、さらに遠野市立図書館所蔵の関敬吾資料「村の話」切り抜きを参照し、一九九八年「青森県史叢書」上下二冊として刊行できた。関先生から与えられた課題の一つをやっと果たした思いである。

『ことわざ集』と『なぞなぞ集』

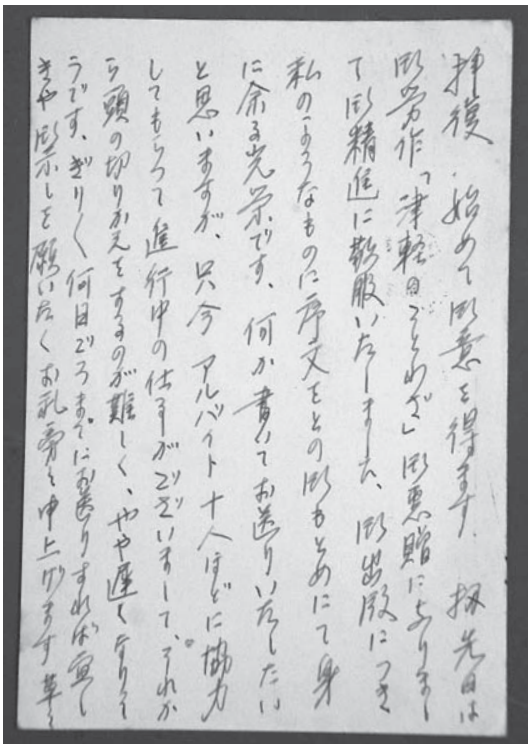
昔話採集のかたわら、伝説・ことわざ・なぞなぞ・俗信などを片っ端からカードにしていた。鈴木棠三先生の『故事ことわざ辞典』や『ことば遊び辞典』が手本だった。地元の新聞に連載していた「津軽のことわざ」を一冊にしようと思い立ち、その切り抜きを鈴木先生にお送りし、序文をお書き頂けないかと手紙を差し上げた。私の一方的な思い込みを先生はそれを真っ正面から受け止めて下さった。すぐに返事を頂いたのである。

拝復　初めて御意を得ます。扨先日は御労作「津軽のことわざ」御恵送に与りまして御精進に敬服いたしました。御出版につき私のようなものに序文をとの御もとめにて身に余る光栄です。何か書いてお送りいたしたいと思いますが、只今アルバイト十人ほどに協力してもらって進行中の仕事がございまして、これから頭の切りかえをするのが難しく、やや遅くなりそうです。ぎりぎり何日ごろまでにお送りすれば宜しきや、御示しを願いたくお礼旁々申し上げます。

早々（1966年9月20日付葉書）



鈴木1　1966.9.20　葉書表



鈴木2　1966.9.20　葉書裏

思いがけない吉報に喜び、「一一月初めごろまでにお願いします」とお手紙を差し上げた。そして、約束通り速達便で序文が届けられたのである。この本は一九六七年、青森県児童文学研究会から刊行された。

拝復　御丹精の津軽ことわざ辞典、立派な出来にてお喜び申し上げます。拙文などはまことに無くもがなの感があります。津軽のなんじょを御著述の由、もし余部あらば一部お頒ち下さいませんでしょうか。まずは御礼やらお祝いまで。敬具（1967年7月23日付葉書）

先生は地方の小さな資料にも目を止められて、『津軽のなんじょ』[2]『青森小ばなし選』といったものまで所望されたので、お送りするとすぐに感想を書いて下さった。

残暑の折からお元気で御精進の事と存じます。扨、津軽のなんじょ頂き御厚礼申上げます。謎の分類は斎藤氏もやっていますが[3]、どうもうまくいきません。小生もことば遊び辞典では五十音順に並べてしまいました。御高著のように答えの品名を分類するのが一番いいかもしれません。もっともことば遊び辞典では古典のナゾが多いので、そうも行かない処がありましたが、お礼まで。（1967年8月3日付葉書）

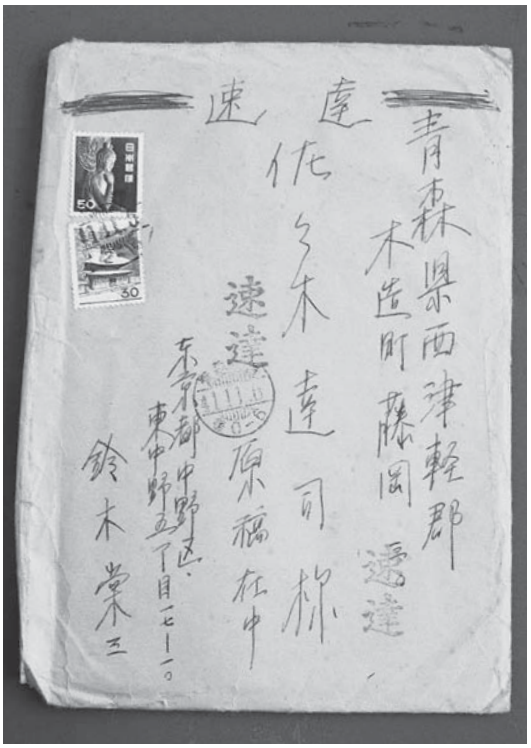
また『津軽のなんじょ』をベースにして、一九七一年に青森県文芸協会から『青森県なぞなぞ集』を刊行した時も、鈴木先生に序文をお願いした。

前略　遅くなって済みません。よろしく御判読下さい。小著「なぞの研究」（東京堂版）を差上げるとよいのですが、手本になく残念です。ことば遊び辞典よりは多少進歩し、やや整理されていますので読んでいたゞければ幸甚です。

御健勝を祈ります。敬具（1971年5月31日付封書）

なぞなぞ集、立派に出来てお目出度う存じます。小生、対馬に行って居てお礼が遅れました。今度の旅は、対馬の神道という書物をこの秋に出すためですが、実に楽しい旅でした。なぞなぞ集、余部があるようでしたら保存用にいま一部いただきたく存じます。帰宅したばかりで落ち着きませんので、取りあえずお礼のみ。早々（1971年6月23日付葉書）

『青森県昔話集成』上巻ができたとき、鈴木先生にもお送りした。このころ先生は東京から鎌倉に転居されていた。

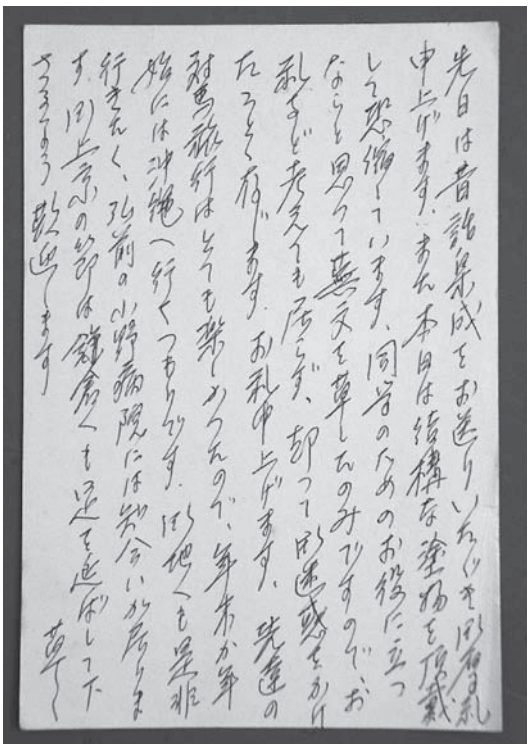


鈴木3　1971.5.31　封書表

鈴木4　1971.5.31　封書本文

先日は昔話集成をお送りいただき御厚礼申上げます。また本日は結構な塗物を頂戴して恐縮しています。同学のためにお役に立つならと思って蕪文を草したのみですので、お礼など考えても居らず、却って御迷惑をかけたこと、存じます。お礼申上げます。先達の対馬旅行はとても楽しかったので、年末か年始には沖縄へ行くつもりです。御地へも是非行きたく、弘前の小野病院には知り合いが居ります。御上京の節は鎌倉へも足を延ばして下さるよう、歓迎します。

早々（1971年6月30日付葉書）



鈴木5　1971.6.30　葉書裏

鈴木先生からのお誘いもあり翌年の一月三日、大船の親戚宅からお電話して鎌倉のご自宅にお訪ねした。先生は和服姿でバス停まで迎えに出てくださった。新築間もない書斎や書庫を案内して下さった。書斎には机が離ればなれに三つ置いてあり、書庫には電動式書架が入れられていた。先生は仕事を切り替えるたびに机を移動するのだと言っておられた。「どうして辞典ばかり作られるのですか」との愚問に対して、「自分が使うためだよ。資料だと使いづらいので」と笑っておられた。鈴木先生にお目にかかったのは後にも先にもこの時だけである。

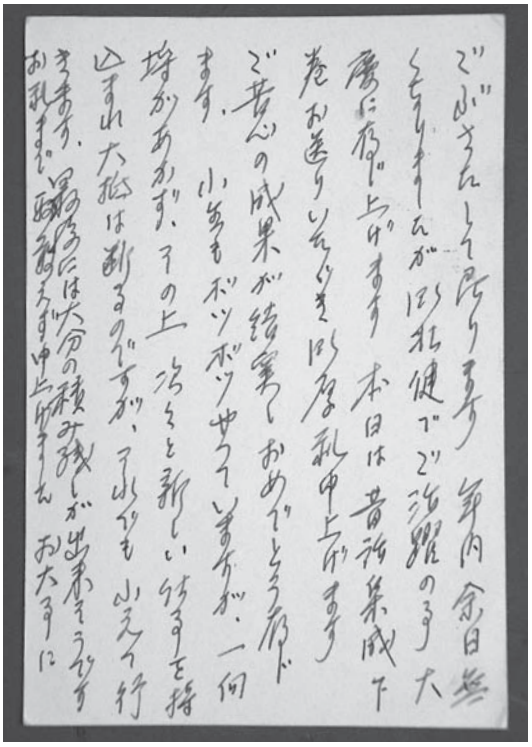
ごぶさたしました。津軽ことわざ辞典改版が出来、小生にもいたゞき御厚礼申上げます。本を出したら売れるに越したことはありません。同慶にたえません。なお同じ本屋で小ばなしの本を出しているようですが、あっせんしていただけませんか、お願いします。

私は明日の飛行機で壱岐へ行きます。山口麻太郎氏の著作集を出版する件で、先日から奔走しています。三日の船で対馬へ行き、十日すぎに帰宅の予定です。こんどは大分収穫がありそうです。先日来対馬叢書というのを企劃、まず一冊出たのであと三四冊年内に出します。（1972年7月3日付葉書）

前略　ごぶさたしました。青森小ばなし集御恵送を賜り厚く御礼申上げます。小生二日に対馬へ出かけ、昨十八日に帰宅しましたのでお礼がおくれました。対馬では連日の悪天候でしたが、文献のコピー毎日やり一向退屈しませんでした。かなり収穫がありましたので、対馬叢書としてこれから続々出して行くつもりです。取りあえずお礼まで。早々（1972年7月3日付葉書）

ごぶさたして居ります。年内余日無くなりましたが、御壮健でご活躍の事、大慶に存じ上げます。本日は昔話集成下巻お送りいただき御厚礼申上げます。

ご苦心の成果が結実しおめでとう存じます。小生もボツボツやっていますが、一向埒があかず、その上次々と新しい仕事を持ち込まれ大抵は断るのですが、それでもふえて行きます。最後には大部の積み残しが出来そうです。お礼まで、取敢えず申し上げました。お大事に。（1977年12月10日付葉書）



鈴木6　1977.12.10　葉書裏

鈴木先生はどんな小さな民俗資料にも関心を寄せておられた。書名がわかるとすぐに求めてこられ、お送りするとすぐに感想や意見を寄せて下さった。次の書簡は、津軽ことわざの意味についての問い合わせと、語源についてであった。後者は、「猿蟹合戦」の千匹猿が津軽ではエンビザル（一人用もっこ）と転訛していることについて私の書いた文章について、語源をご教示下さったものである。

ごぶさた致して居ります、お元気ですか、津軽の民話いただき御礼申上げます、「年寄りのぼごり死にぼごり、わらしのぼごり泣ぎぼごり」は直訳するとどうなりますか、エンビは語源としてはエブリではありませんか、私は間もなく満八十歳になります、足が弱ったのと眼がかすむ以外はまず健康で目下原稿渡し済みの著書が四冊あります。藤岡屋日記の覆刻は十巻までこぎつけましたが、あと五巻ほど残って居り、他に総索引の仕事が控えているので仲々怠けら

れません　不一（1991年10月7日付葉書）

おわりに

大学教育も受けず研究機関にも所属していない私が、口承文芸に五〇年間も関わってこられたのは、関先生・鈴木先生の著作に啓発され、手紙で指導をお願いし両先生が暖かく導いて下さったお陰である。

今回、報告の機会を与えて下った歴博の皆さんに感謝申し上げます。

＊本稿は二〇〇五年九月二四日、山形県で行われた歴史民俗博物館共同研究で発表したものに加筆訂正したものである。

＊文中の敬称は「先生」が適当と思われるが、煩瑣にわたるので学恩を受けた大先輩に用い、同年代の方々は「さん」とさせて頂いた。

註

（1）小島瓔禮『神奈川県昔話集』（全二冊、一九六七・一九六八年、神奈川県教育委員会）

（2）斎藤正・工藤祐・佐々木達司編『津軽のなんじょ』一九六〇年、津軽民話研究会。

（3）斎藤吉彦「津軽謎々の分類」（『民族』四―二）一九二九年。場所明示型、時間明示型、地名謎・字画型・文字謎・思わせぶり型など内容を一三に分類した試案。

参考文献

関　敬吾　一九五〇　『日本昔話集成』第一部　動物昔話　角川書店
鈴木　棠三・広田栄太郎　一九五六　『故事ことわざ辞典』東京堂出版
鈴木　棠三　一九五九　『ことばあそび辞典』東京堂
佐々木達司　一九七一　『青森県昔話集成』上巻　青森県児童文学研究会
青森県環境衛生部県史編さん室　一九八八　『奥南新報「村の話」集成』上・下　青森県

（日本口承文芸学会会員、国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者）

（二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年一一月三〇日審査終了）